



楠の葉新聞

【先駆者の言葉の雫】

We do not stop playing because we are old. We grow old because we stop playing
ヘレン・ヘイズ

Mosto Likely to Succeed

成功する可能性が最も高い

右の言葉は先日エンクロスで上映された映画のタイトルです。このタイトルは直訳すると「成功する可能性が最も高い・・・」となります。何の可能性が最も高いのか？そのことを考えながら映画を見ました。今回はこの映画の内容と映画を鑑賞して感じたことや想ったことを書きます。

2015年にアメリカで製作されたドキュメンタリー映画です。舞台はカリフォルニア州サンディエゴにある公立チャータースクールの High Tech High (HTH) という高校です。

この高校には時間割がありません。テストも通知表もありません。生徒は1年間、チームで決めたテーマを探究し、発表会でその成果を発表します。「プロジェクト学習」というそうです。今から200年ほど前、世界は新しい教育を模索していました。産業革命による工業化を支える労働者の育成が求められました。

日本はその最先端を行くプロイセン（現ドイツ）の教育を模倣します。アメリカも同様に工業化に対応できる人材を育成するための教育をすすめます。どのような人材が必要なのか、マニュアル通りに機械を操作し大量生産をスムーズに行う労働者の育成。そのためには、画一的な教科書と学習計画が求められました。日本では6年間と3年間の義務教育によりその人材を育成していきます。そして1960年代日本の「重厚長大産業」の中核を担う人材として高度経済成長期を支えました。日本がプロイセンから教育の在り方を学んではからおよそ150年あまりそのシステムはほとんど変わっていないようです。世界の産業構造は激変しているにもかかわらず人材を育成する教育システムは旧態依然。この映画はそのことに切り込む目的で作られたものと理解できました。

機械の操作は全てコンピュータで制御されています。やがてAIにより、今ある仕事の6割がコンピュータに奪われます。人はクリエイティブ（創造性）でなければ職に就けない時代が訪れるそうです。しかし、教育は産業革命のころから止まっている。教育の劇的な変化が求められているのかもしれませんが、そこで考案されたのがHTHによるプロジェクト学習です。生徒はチームとしてプロジェクトに取り組み、発表会に向けて探究していきます。うまくいくこともあれば全く前に進まないこともある。そのたびにチームで改善点を模索しながら前に進む。そのような学習を1年間続けながら、学年

末の発表会に臨みます。劇を作り上げて拍手喝さいのチームもあれば、部品が合わずに機会が作動せず発表が終わるチームなど成果は様々です。しかし、思うように発表ができなかったチームも何がダメだったのかを確認し再度チャレンジして「成功」を体験します。全チームが各プロジェクトを達成させて学年を終えます。そして最後に高校卒業後の進路状況が紹介されました。大学進学率98%。テーマを探究して発表会を行っただけの3年間でどのような知識や能力を身につけたのか。そのことについて詳細には述べられてはいませんが、映像を通してどのようなスキルを身につけたのかを推測することは十分にできました。AI社会で対応できる人材が育成されています。

日本でも2年後「プログラミング教育」が始まります。AI社会に対応できる人材育成がその目的の一つになっているようです。学校単位でも上映が

可能であればぜひ岡富中校区で上映会をしたいと思います。



先日、延岡に移住してこられた方のお話を聞く機会がありました。延岡の魅力は？の問いに「死んだ鳥が土に帰っていく場面を見ることができるところ」「都会ではコンクリートの上で死んでいきます」「自然を実感できる場所です」視点が違う。思考のチャンネルを少し変えようと思いました。

今回の先駆者ヘレン・ヘイズ、米国女優、1931年アカデミー主演女優賞受賞
日本語訳では「年をとったから遊ばなくなるのではありません。遊ばなくなったから年をとるのです。」となるらしい。